



巨乳なメガネの優等生を  
犯しちゃうお話しです。

優等生とは...



巨乳なメガネの優等生を  
犯しちゃうお話です。

優等生とは..

企画：◎るーじゅら

○○ちゃんは優等生だね。

勉強も出来て明るくて……

私はある年までは、明るい性格で勉強も熱心だった。

じつは成長して

徐々に転機が訪れていたのだ。

私の人生を狂わす転機が……

少しづつ大きくなって来た胸が  
気づいた時には巨乳に  
なっていた。

私は体の成長とともに  
優等生だった自分が消えていくのを感じた。



……

あの日を訪れた



もう日が暮れてかかっていた。

何気ない日常が終わりを  
つけていた。



一人の帰り道は慣れたはずだった。  
当たり前のように家に帰り、当たり前のように  
明日を迎えるはずだった。

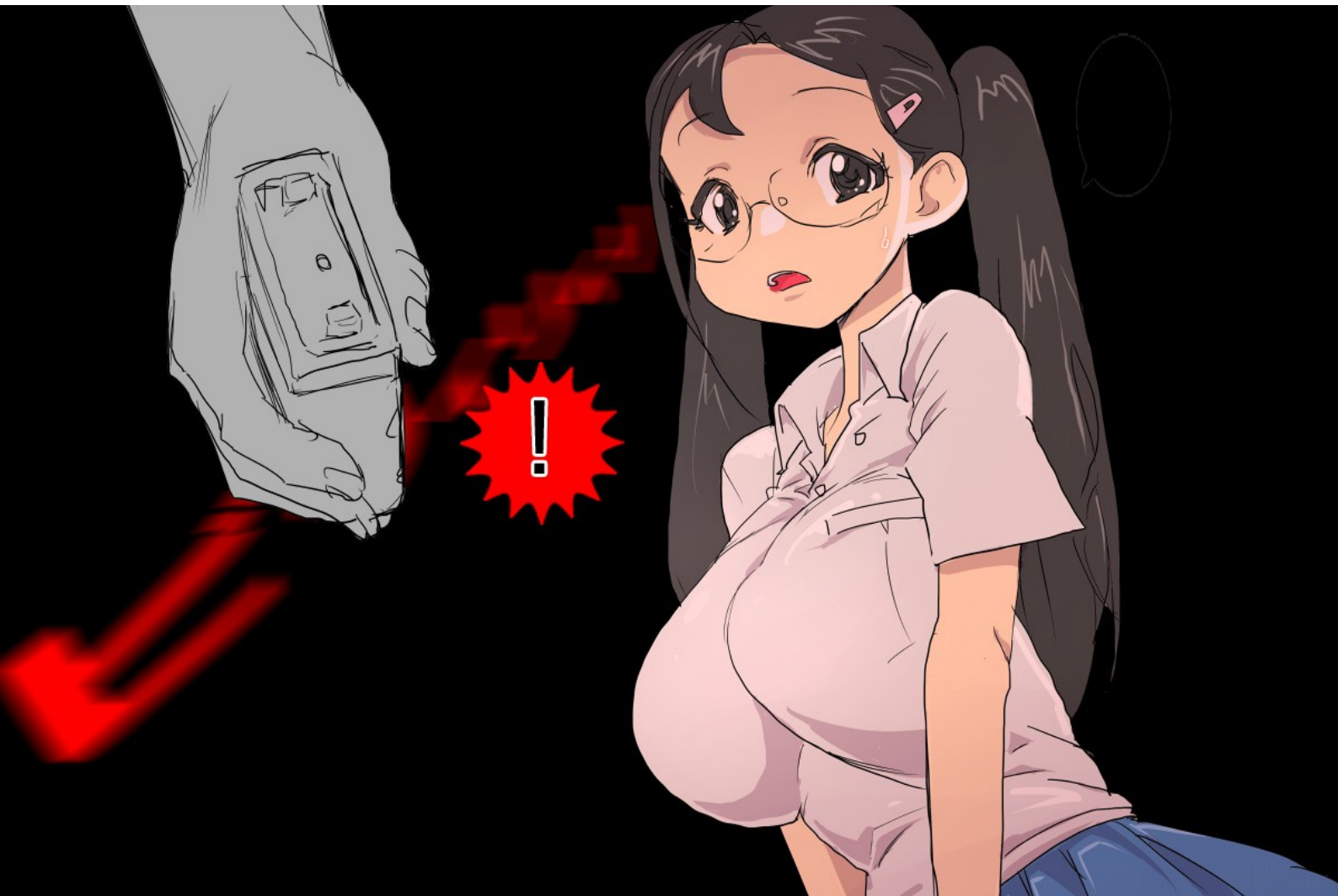
もう日が暮れてかかっていた。  
何気ない日常が終わりをつけて  
いた。

誰？

ふと誰かに呼ばれた気がして  
振り向いた。

しかしその瞬間……







意識が遠のいてきた。。





気分は  
どうだい？

とれだけ時間がたつたさうか。。。。

気づいたら身動きがとれなくなっていた。



ふふ。。。  
薬が効いてるか

意識はまた朦朧としていた。  
わかる事の方が少なかった。



どれだけ  
触れたかった・・・

男はおっぱいを  
私の胸を揉みだした。

ふふふ。。。  
たまらんね。。。



太きい。。。  
オッパイ太きい。。。

男は興奮してゐようだった。。。

ちやうど男が言っていた薬のせらが

こんな状況でも

私の頭はまたホーンと鳴いてゐる。。。。

うめえ



でけー  
最高！

私は上着を脱がされた。。

でけーから何をされたのか容易に想像がつかない。。

# 巨乳○学生

近所では有名になっていた。

最高学年になつてからは、私の胸はF  
大きくなつていた。

だから周囲の視線も  
痛いほどわかつていた。

特に同年代ではなく  
男の先生からの視線がいやだった。。。

先生。。。。？



この声はさやな記憶より残っているぞ。。。。

無理やりランニングを走らせたための体育の先生。。。。

**大きく揺れる胸**を見ながら無理やり

私を走らせたあの先生。。。。

「ふふふ、かすかに意識はあるみたいだね。」

「どねたけこの時を待っていたか……」

「君が……。君がいけないんだよ……」

「はあ……。はあ……」

「こんな巨乳……。反則だと思わないか？……」



はあ。。。。  
おお。。。。  
はあ。。。。  
はあ。。。。

抵抗したいが  
体が動かなかった。。。

「お前のオッパイは何回オナニーしたか・・・」

「先生お前の巨乳が好きなんだよ・・・」

「お前が身体検査の時のビデオも持ってるんだぜ、>>>>」

「下着脱ぐ時の、**ぽんぽん**って感じがたまらんかったよな・・・」

「写真もたくさん持ってるぞ・・・」

「更衣室の時の、教室で先生の時の・・・」

「わかるだろ？ 先生がどれだけお前を愛してるか・・・」



So...  
A...

あああ...  
おっぱいの感触が...

先生は  
私の胸の谷間で  
自分の物をほさんだ...

生暖から感覚が伝わる...

先生の意識がはじけてきたが体が動かなくなる...

先生の指が...  
あんなに...



先生は  
私の胸を  
よせて激しく  
動く。。。

7%

バズる  
最高。。。

7%

はあ、  
SS。。。



わ...  
...  
...  
...

わ...  
...  
...

アッ♡

アッ♡

わ...  
...  
...



じゅわん

先生の精液が  
私の顔で。。

私にはおまんこ  
恥ずかしい  
気持ちにな  
りました。

おまんこ。。  
おまんこ。。

。。。。  
。。。。

どんな薬を使われたかわからないが、体は結局動かなかった。

そして私はまた気を失った。。。。

。。。

色々夢を見るような感じだった。

体の感覚は戻ってきたが今度は頭がボーンとしていた。

小さい時の記憶がよみがえってくる。。。

人よの発育が良かった私は

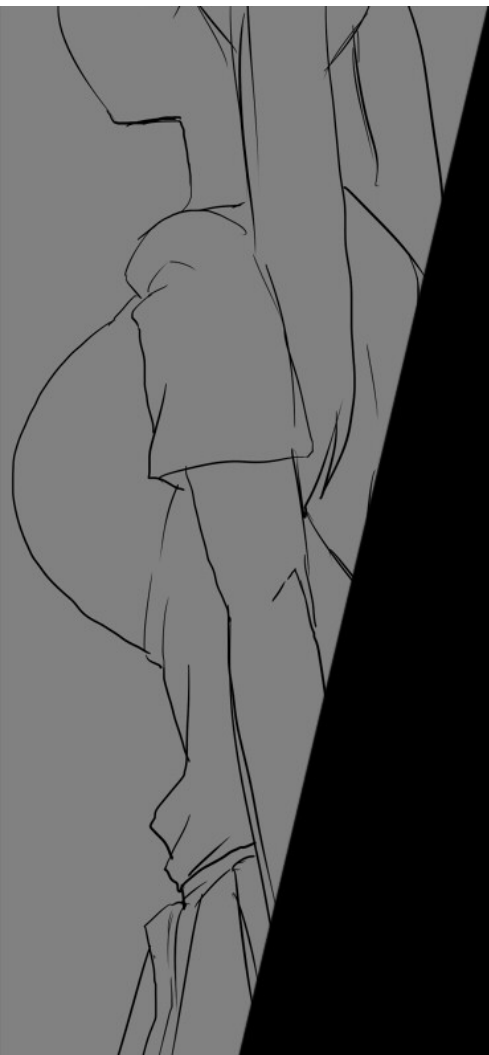
よくクランを馬鹿にされた。。。

## 牛の乳

それがクランでの私のあだ名だった。

それがいやで何度も学校を休んだ。

じかに家に行ったらいた年で離れた兄はじつはまっぴらねのがらだった。





兄は勉強を教えるという口実で私のオッパイを何度も  
もんできた。

兄は今まで女性と付き合った事がなく  
私の体をオカスにしてオナニーをした。

それらの言葉ばかりを私に覚えさせようとした。

そして兄が私に手をかけるのは時間の問題だった。



私の初めての相手は兄だった。

涙目の私を見つめながら兄は無言で私を犯した。

私は兄には逆らえなかった。

アハハハ、イマアハハ。。。。

アハハハ、タニ。。。。

ありとあらゆる言葉を覚えさせられ  
その中で行為を実際に強いられた。。。。





どうやって私はいつか  
そんな行為を兄と当たり前のよう  
に交わすようになったらいい。

もう私は優等生でなくなっていた。

学校に行かなくなった私は徐々に  
本当に勉強も出来なくなっていた。



もう勉強が出来て明るい私は  
そこにはなかった。

暗く、工口ら事が考えられなら  
馬鹿な自分しかなかった。。。

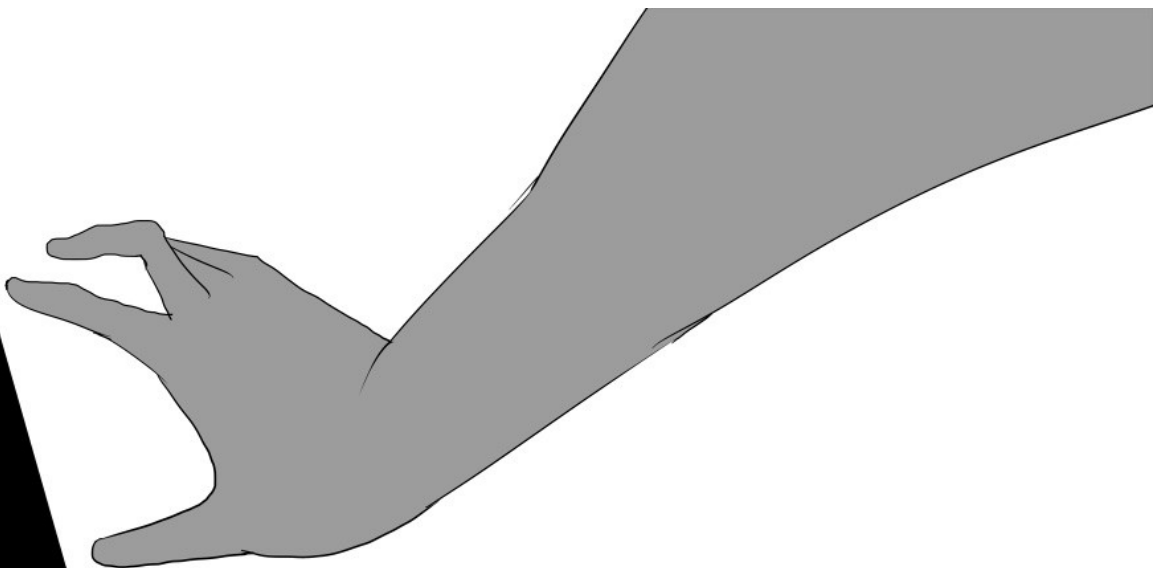


「うんっ」

目覚めた空間は以外と明るかった。

外への窓ははるか頭上にある、遠く太陽が覗いている。

裸の裸の体の表面を乾いた精液がぬるぬると滑る。



手に力はまだ入らなかった。

立つことはできるが、体全体がけたる感じだった。



「起きたらもうだな」

いつからそこにいたのが男二人が私の目の前にいた。

一人は確かに見覚えがあるあの先生。。。

そしてもう一人も確か学校にいた先生だった。。。。



やめ。。。あ！

先生。。。

二人は私を力づくで押し込めようとする。

大人二人に勝てるはずもなかった。

激しく胸を揉まれ、下腹部を強く弄られる。

「オコシやいなさ旦那。」

「MS Roomマンチもあるんたせ。身体検査で確認済みだよ。」

先生達はとういつて執拗に私の胸を揉み続けた。



「たまんねえな・・・」

「何んや、女だも。MS Roomの先生は揉み続けよ。」

私は  
体がじびける  
ような  
快感にうつまれた。

はあ。。。はあ。。。  
OHMYGOD。。。

毛

たまんねえポリュームだ。  
はあ。。。はあ。。。



兄にうけた性教育が

私を普通じゃなくしていた。。。

心が嫌がり体が欲しがる背徳感が  
私をいつそう興奮させた。。。



「 呜呜… 自分か泣いてる… 」

私に抱きかかってくれませんか。

「 ママ… 抱いてほしい 」

私に先生の胸の全体を舐め回した。

やべえ・・・  
出る！・・・



先生は私の頭を抱えると喉奥まで  
ちん〇を突っ込んできた。

ちん〇が喉にあたる感触・・・

そして精液が喉奥に流れていく感触がたまらなかった・・・



ズッ

後ろからいかせて  
もらいます。



私は前から後ろから  
犯された。  
体は完全に反応していた。  
自分から若干腰も動かしていた。

110

110

110

はあ...  
OHMYGOD  
最高!

先生は精液が今度は私の顔面にかかる。

「はぁ。。はぁ。。顔射た。。」

顔全体が精液にまみれながらも後ろから先生のチンポが

私のまんこをぐんぐんしゃべっている。





こらっ  
本当のヒロイン  
やったな。

ああ

あっ

もっと・・・  
もっとついて  
先生！

私は  
本性あきまじりなっつた。



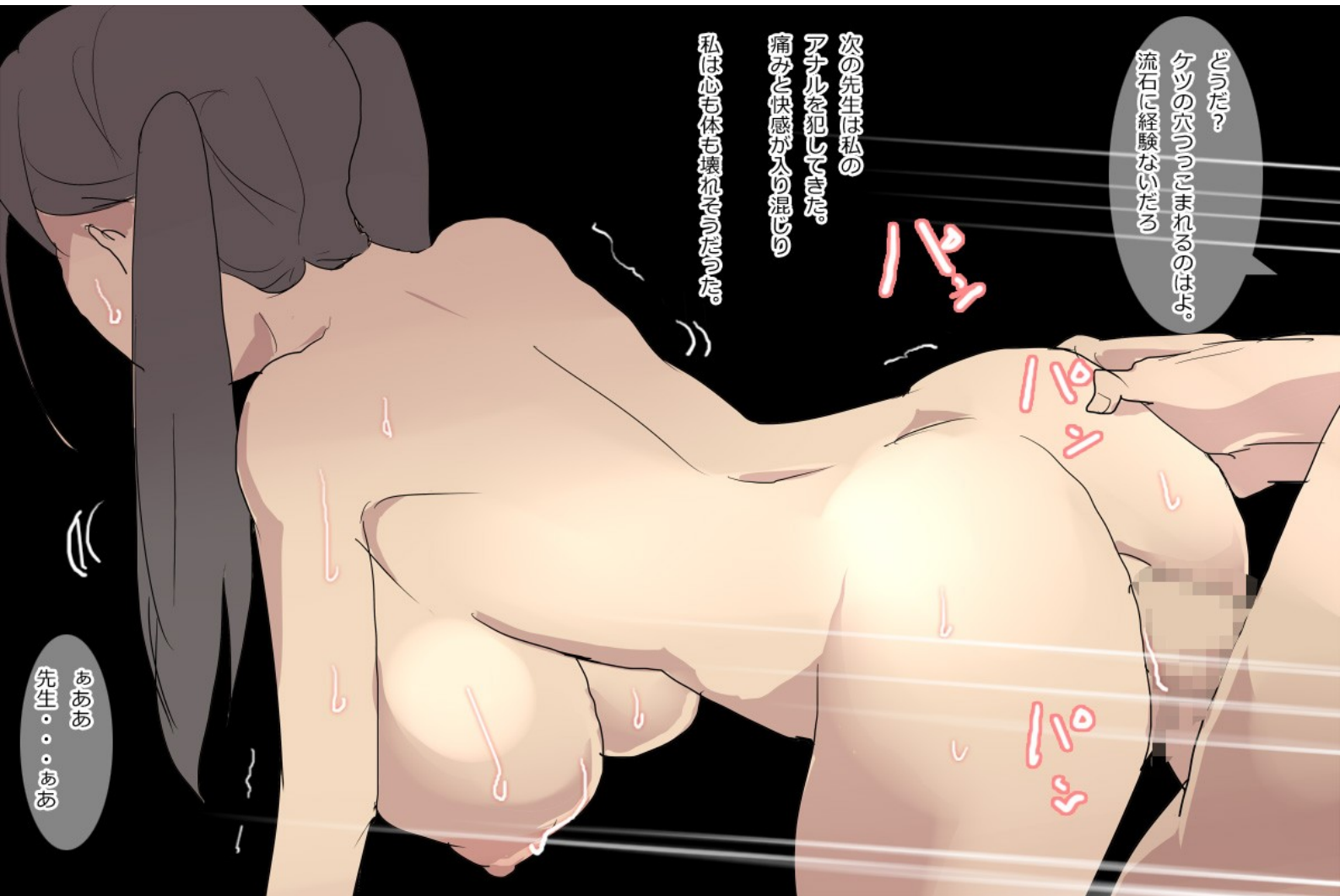
どうだ？  
ケツの穴つつこまれるのはよ。  
流石に経験ないたる

次の先生は私の  
アナルを犯してきた。  
痛みと快感が入り混じり

私は心も体も壊れそだった。

ハッ

あああ  
先生……ああ





あはああ  
先生、気持ちいいiiiiiiii  
あああ

大きい体に押しつぶされ  
私は完全に狂ったメスいぬど  
なっていた。

アソコとお尻の穴から  
先生の精液がとめどなく  
溢れます。

体の中は先生達の精液で  
パンパンだった。



こうして私は完全に

この先生二人の奴隷となった。。。

この先生達がいなければ

私はもう生きていけない。。。

先生の言う事なら何でも聞く

それが一番の**優等生**の証だから。。。

しかし

しばらくしてこの先生二人は  
いなくなってしまう。

私を監禁した罪人として。。

そして私は。。。

また一人になった。。。

何。。

何。。。

何。。。。

何。。。。。。



誰か私を犯して。。。

おわり

©る-じゅら